



TITLE:

消費函数をめぐる省察

AUTHOR(S):

高田, 保馬

CITATION:

高田, 保馬. 消費函数をめぐる省察. 経済論叢 1956, 77(3): 205-220

ISSUE DATE:

1956-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/128910>

RIGHT:

經濟論叢

第七十七卷 第三號

消費函數をめぐる省察……………高 田 保 馬 (1)

金融資本の概念と本質……………靜 田 均 (17)

明治末期の財政政策……………眞 藤 素 一 (37)

栗原百壽著「農業問題入門」……………大 藪 輝 雄 (61)

[昭和三十一年三月]

京都大學經濟學會

消費函数をめぐる省察

高 田 保 馬

一

戦後のアメリカに於て、消費函数に關する論争が行われ、それからひいて消費函数の性質に關する思索が深められて、いわゆるモディリアアニ・デュゼンベリイ理論の結實となつた。それが今日に於ては殆んど定説視せられ、英吉利の學界に於てすらも之を承認するという大勢が示されている。茲には正面から此理論をとり上げて分析を試みようとするのではない。消費函数をめぐる理論的説明、いわば内面的分析を試みようとするに止まる。三年ほど前に筆をとりかかつたが執筆中に故障にあい、中絶のやむなきに至つたが、今はその斷章すらも失つた。かつての思索のあとづけをしようとするのである。

このデュゼンベリ消費函数論は私にとつては何等新奇のものとはいへぬ。ただケインズの消費函数が無言のうちにある。私はケインズ『一般理論』に於ける此固定性の思想を知る時に之を腑に落ちぬ思考様式であると考え、之を原論の諸著者に紹介する時ごとに、強く反撥を感じていた。私は『社會學原理』以來、物質的欲望の上昇について一定の見解をもつづけ、『經濟學研究』に收めたる震災直後の小論文に於て之を展開している。はじめて之を

公開の席上に於て公にしたのは大正九年のことであろう。今から三十五年前、それでも既にヴェブレンの『有閑階級論』から十年あまり後であり、タルドの『模倣論』からは更に隔たつてゐる。

消費函數、裏返せば貯蓄函數の理論は、ケインズ學派に於ける資本主義成熟觀ともいふべき思想の前提をなせるものである。それはケインズの動學的立場をして特有の地位を占めさせる。それが戦後の失業觀を中心として論争の中心となり、一定の修正を受けたということは、やがてその資本主義觀に於て修正を受けることを意味するであろう。此意味に於て消費函數の問題は廣汎なる範圍に亘つて重要性を有すと見ればなるまい。

二

消費函數の問題を考えるに當り、まず手がかりとなるものは、一々の財に關する需要函數乃至部分的消費函數である。これについては、エンゲル法則以來、一定の定説が確立せられてゐる。所得を横軸にとり部分的消費即ちある財の消費を縦軸にとるとき、(a)消費の線は右上り即ち所得につれて増加する。(b)且つ一定の所得に於て横軸に交わる。云わば一定の所得からはじまる、緊要の度に應じ、所得零のところに於て縦軸に交わり一定の裁片を示す。(c)大體に於て直線を以て示し得る。(d)傾斜 b 、裁片 a は一定の常數である。アレン・ボウレイに於けるが如く、需要(價値量) x と、所得 Y との間に次の關係があると見られる。

$$x = a + by$$

この部分的消費函數の形式が(全)消費函數にもひろげられて、消費總數 C と所得 Y との間に同一形式の關係があるものと見られ、常數 a 、 b にそれぞれの場合について求められる。勿論直線の想定は其妥當性が事實によつてのみ認

められる。これを理解する爲に、效用の性質について次の如き見方を試みたい。

(1) 一々の物財はすべて用役の束である。一の物質として見られる、例えば腕時計は、時を示す用役 a 、而もそれを極めて正確に示す用役 b 、一週間巻という用役 c 、美しき裝飾としての用役 d 、高價のものであることを人に示す用役 e 、贈與者の愛情を示すという用役 f ……等の束としてそれぞれの效用をもち、時計の全效用はこれらの總體量として見られる。各の用役は他の物財の用役に於て代替財をもつ。また時には此用役の中には負の效用をもつものがある。此時計が小さくして紛失し易いという用役、スリにねらわれるという用役、金があると見て高き料金をふきかけられるという用役の如き。これらの諸用役の諸效用から如何にして其總體量としての構成が行われるかは別に分析を要する。茲にはしばらく、それらの總和として考える。

(2) 一の財が單一の用役のみをもつことはない。常にいくつかの用役の結合であるが、各の物財の諸用役はある部分は共通して居り、ある部分はちがつて居る。一々の物財に於ける用役の結合はすべて歴史的であり偶然的である。けれども、經濟の發達は大勢から云うと、一財に愈々多くの而も費用のかかる高級の用役を結合させることになつてゐる。かくて消費財は其用役に於て愈々多様となるのみならず、又高級のものの結合となる傾向がある。そこで一々の物財をとつて見ると、必需品の性質をもつものでも、追加的な數多の用役を含む。發達しきつた經濟には、一方にはいわゆる截片をもつところの、即ち所得零に於ても a だけの消費があるところの物財があるとともに、一定の所得をまたなければ、消費がはじまらぬ（從つて截片が負債をもつところの）物財が多い。此間に於て高級財といわれる複雑財は所得の増加につれて益々多く消費の範圍に取入れられ、單純財即ち下級財は所得が高くなると消費の範圍から消える。經濟が更に發達するとさき的高级財も下級財となりて一層高級のものに取代られる。こと

に高級財が高き地位の象徴となり、誇示の爲に役だつに至ればこの具體的な物財の消費範圍に於ける交代が急速に又は顯著になる。

ここに階級財(Klassengüter)の觀念が生れる。發達せる社會に於ては、代表的なる地位にある階級(階層と同義に於て)はそれぞれ主として消費する物財の種類を異にする。同一の百貨店に入りながらAの階級の人々は其層の所得の人々が買うところの賣場に於て物色する。BC等の階層人亦各異なる商品をも色する。AにとつてはBの階級財が下級財となる。BにとつてはCの階級財が下級財となる。又CにとつてはBの階級財は上級財となり、自らの消費範圍に吸収せられない。下級財の觀念は財の價格騰落によつて其需要が如何に變動するかを中心として構成せられるのを常とする。それは價格による需要の弾力性をめぐるものである。これと所得による需要の弾力性をめぐるものとは必ずしも趣を一にしないが、又親縁を有するものである。今はその問題に立入ることを回避しよう。各階級の區別に對應する階級財は相互の間に連絡を有し、同種の商品であつても異種の商品であるかの如き様相を呈する。けれどもその關係に立入ることもまた、今の仕事ではない。

(3) 異種の用役の束と見るべき各の物財は前述の如く、階級財として振舞い、従つて所得の上昇につれて經濟の範圍から消滅し易い。けれどもそれに包含せらるる各の用役に至りては消滅することはない。一たび消費の範圍にとり入れられるやいつまでも存続する。ただ抱き合せられる他の用役が次ぎ次ぎに變更するだけのことである。此意味に於て要素財としての各用役についていえば下級財として所得上昇により消滅することはない。そうして一定の要素用役(従つて要素效用)は各物財を通じて限界效用均等の法則に従つて需要せられるであらう。他の用役と抱き合せられている要素用役の效用に従つて需要は結合需要の法則(マアシャルその他)に従つて決定せられるであらう。

かく見るとき經濟の世界はすべて物財としての商品が相互に作用して構成せらるるが如くに見えながら、其實はかかる用役の錯綜より成る。

各の用役はそれぞれの效用をもち、それらの總體として、各物財の效用が體驗せられる。此の如く用役、従つて效用を異質のものとして分析することが、經濟の理解的説明をはじめ十分に可能ならしめる。例えば下級財（いはゆるギッフェンの場合）についても選擇理論は選擇の事實だけを認めて、それを動機に分解することをしない。それゆえに、説明は理解の究極に到り得ず、従つて社會科學の自然科學に對する優越性は、任意に放棄せられる。用役の束を分解する作業はJ・B・クラークに於て企圖せられていると思うが、この方向の展開はまだ着手せられていないように見える。

三

今まで述べたる精神に従つて、物財の效用を一の見地から二に大別したい。一は物財の物的性質によるものの、いわばそれに内在するところの效用である。さきの腕時計の例についていえば、時を示す用役、一週間巻であるという用役は實物に内在する效用を示す。それが對社會面に於てもつ用役は種々のものであり得ようが、經濟理論の立場から見ても重要な用役はその誇示の用役である。云わば、その所有者、使用者をして、一定の社會的地位、即ち勢力を誇示するのに役立つということである。この對立を實質用役と誇示用役、又は實質效用、誇示效用として表示し得るであらう。前者についていえば、一財に認める各自の效用はすべて個人對該物財との交渉によつて定まり、何等社會的なる干渉によつて變化を與えられることはない。勿論ここに誇示の效用としてあげているも

のは、其重要な側面から名づけたるものであつて、其内容はこの名稱よりもはるかに廣い。例えばその時計の所持によつて主體の社會的に得るもの、失うもののすべてをさす。その所持が社會的交渉を通して與うる欲望充足をさす。中について其人の社會的地位を表示することが主たる用役であり、此用役にもとづく効用が主たる効用である。それゆゑに誇示用役、誇示効用とよぶ。此誇示の効用は之を比較による効用といひ得るであらう。社會の成員は一方に於て親和し。他方に於て相對立する。これは結合と對立又は反對との關係である。けれども同時に上下の關係に於て立つ。此上下の關係に於て立つ限り、常に優越せる勢力を獲得しようと求め、又得たる勢力を示そうとする。之を示すことによつて優越を明確にし、周圍からかかるものとして待遇せらるるからである。

經濟理論は久しく、次の態度をとつていた。各主體は各獨立に物財の實質効用を認めそれによつて個人的需要が定まり、これの集積から社會的需要が定まる。供給についても亦同じ。然るに物財の効用は此實質的効用のみによつて定まらず、比較によるところの社會的効用、具對的に云えば勢力意志から來るところの効用が干涉する。其結果、一財を他人のゆゑに高く評價し又は低く評價する。其結果、新財を採用して勢力誇示を行い、又他人の生活内容にある物財を模倣して之を行う。前者は優れたることを示し、後者は劣らぬことを示そうとするのである。いわば虛榮即ち目だつことを求めるのである。distinction, vanity, conspicuous consumption, demonstrationなどの何れの表現を用うるにせよ。多くの場合に於て一の物財は一方高き實質効用をもつと共に、他方誇示効用をもつ。ところで前者は他のあまたの物財によつて得られる。基本的なる欲望を充すものほどそうである。例えば私は寒暑風雨を凌ぐためのものであるならば綿服はすべての點から見て優秀であるが、低廉常用、誇示の用にはたため。他の衣服はこれに種々の用役を追加するところに成立する。けれども、追加せらるる用役は主として可逆的意味のもの、

何れでなくてはならぬものというのではなく、多くは誇示の用途によつて選ばれるものである。例えば今日の日本に於ては、殆ど綿製和服を用いることはない。ある階層にては英國製の生地、高級仕立の服を着る。費用の大部分は實用以外、其地位を表示するに役立つ用役の爲に投ぜられる。意匠スタイルに嗜好を凝すかに見えて、それは如何に新式のものにして、他より高い金を拂つたかを表示しようとするのである。又それらを着得る階層に列し得ているかを示そうとする。一定の物財は諸種の用役の束であるとしても、其中に效用の高く見られ高き價格の主として拂わるるものは、かかる場合、誇示又は表示の用役にして、實費用役ではない。時には不便を忍んで綺麗をかざる。王冠束帯を見よ。

ところで實效用はすべて、理知従つて技術の前進によつてみだされて行く。それは非可逆的のもの、一方向的推移である。例えば乗馬から自動車に至るまで。けれども今日高級の自家用外車が常に必要であるのではない。必要は大抵バスによつて充される。誇示がキャデラックを要し常備運転手を要する。今日於て其収入が消費をまかない得れども貯蓄を許さず、貯蓄零の階級がある。その階層の生活の中、すでに多額の誇示を含む。すべて實費用役の必要には、とどまるところがある。誇示用役の需要には止まるところがない。相手に負けず、相手をこえようとするのであるから、ポンプの水が眞空をみたしてゆくごとく、所得の増すところ、生活が上昇して僅少なる貯蓄の餘地を残してゆく。いわばそこに永劫なる消費の競争がある。此競争は誇示の鬭争である。上級の階層の貯蓄率が高いというのも、それはその下の階層からの消費水準追跡が困難であるからのことで、生活の實質が高いから上り得ぬということではない。所得水準が平均して前者の列に達する頃には、そこでは貯蓄が不可能となるであらう。ケインズの資本主義行詰りの理論は此世態をつかまず、人類生活の長期的考察に徹せざるゆえの近眼理論である。

それを墨守した後期ケインズ學派の失業豫測の誤算はあまりにも必然であつたという外はない。

四

これから轉じて階級財のことを述べたい。前述の誇示の用役の知識を前置きにするのである。

社會に幾つかの階級があるとき甲の階級の需要する財と乙の階級の需要する財とは自らちがつて来る。若し階級という表現が社會の上下の大區分を意味するに止まるならば、それ以上の數の上下分割を示す爲に階層という表現を用いるのも宜しかろう。そうすると各階層は別の財を需要することになる。かくて上級財や、下級財という區別を生ずる。

かかる事情を理解するのはさまで困難ではない。前述の如く元來一の財というものは、種々なる用役（役に立つはたらき）の束、又は綜合である。同一種類の財に高下の別ありといわれるのは、これらを同種と見させる共通の用役があるからであらう。穀物、肉類といわるる如く。ところで米、麥、高粱などは共にカロリー源としての穀物である。高粱はまづくて、僅かに生命維持の營養、いわば用役 a を與えるに過ぎぬ。米になれば色快適にして脂肪を含み、消化が易い。それは b, c, d 等の用役を與える。收入の最低の人は高粱を買い、更に收入の高い人は白米を買い、はうとするであらう。勿論具體的の財が如何なる用役の束から成立するかは多くは偶然の史的事情によつて定まり、時には人工によりて用役の新しき複合が作り上げられる。何れにしても、收入の高い人は愈々多くの用役を含む財を需要するのみならず、更に地位、勢力のほどを示すという用役をも含むところの財を要求する。高き收入の人はど實用的な用役の外にこれらの誇示的な用役を買う。後者の比重は收入の高きほど大となる。

價格が下るときに劣等財即ち下級財の需要は減るというのは、價格低下によつて消費者に購買力の餘裕を生じ、それによりて高級財にうつることを意味する。價格が高まるにつれて需要が増す場合があるのは、それが高地位者の標識となり誇示の用役を人々が入手しようとする爲である。此階級財の觀念は消費函數の考察に於て重要な役目を營む。

消費函數乃至消費傾向の理解にこの仕方がある。一は個人的又は合理的方法であり、他は社會的方法である。前者は消費主體を純粹に效用計算機械の如くに考え、一定の所得と價格との條件に従い、あくまで個人の嗜好乃至欲望に従つて消費の順序總量を定めると共に、個人的商量に従つて貯蓄を定めるものと見る。要は、他人の消費様式とは關係なく自己の打算によつて定めると見るのである。他はかかる效用計算の傾向が働くことを否定しないが、それは個々人が獨立に自己の欲望に従つて定めるとではなく、寧ろ社會的事情の考慮に従つて消費を定める。此點をなお明確に説明しよう。

財の效用には、他人が消費するかせぬかに關係なく財主體に備はるものがある。これを實質效用という。また他人が消費するかせぬか、それとの比較によりて定まる效用（又は不效用）がある。これは他人との競争によつて定まる效用である。誇示の效用である。消費理解の合理的方法は個人が前者のみを追求して消費の種類、水準を定めるものと見る。社會的方法は個人が主として後者の效用を中心として、即ち消費によつて自己の地位又は勢力を示そうとして消費の種類、水準を定めるものと見るのである。勿論地位を誇示するに足る財は實質效用を伴うから生活の維持に差支えぬことはいうまでもない。前の見方によれば消費傾向（消費の對所得比率）は一定であるものと考へべきである。

五

財の效用従つて消費財需要の以上の如き性質から結論し得ることは、消費は無限といひ得るまで上昇するであらう、という一事である。それとともに消費上昇の原動力をなすものは、生活の實質というよりも、體面競争である。このことから、消費函数は一定のものではなく、たえず雲の如くに變動するものであること、變動の方向は上昇の一路であることが結論せられる。これは社會の將來を見る上に於て重要な示唆を與える。^(a)資本主義の將來を判斷するには、消費函数の可變性、實質的にはその不斷なる上方移動を念頭に置かずしては、正しき見解に到達しがたいこと、^(b)經濟の狀況に對する短期の豫測をするに際しても、消費函数の可變性、ことに景氣變動による動きをつかみ難いこと。此後の點に關して、アメリカ戰後失業の豫測をめぐり、烈しき論争が行われて、其結果大體に於て消費函数理論の修正が進み、それと同時に資本主義將來觀に對する新しき修訂が加えられ得るに至つた。新しき消費函数の理論として代表的な地位を占めるのは、デュウゼンベリの立場である。

デュウゼンベリの消費理論従つて貯蓄理論の構造は次の如きものと概括し得るであらう。分析と批判とに重點をおく積りであるから、簡単に述べたい。

時にデュウゼンベリ・モディリアニ消費函数の組織と稱せらるるものは、二の部分を含む。一は景氣の上昇期下降期に於ける二種の消費函数の知識であり、他は變數として相對所得を含むところの消費函数の知識、又は相對所得を變數とする消費函数の知識である。ところで前者に關しては其大體が既にモディリアニによりて確立せられ、デュウゼンベリは其修訂新者であり、其示唆についてはともにヴォイチンスキイに負うてゐる。後者についてはそ

れがデュウゼンベリによつて基礎づけられてゐると云ひ得よう。基礎的な問題は後者にある。

合理的理論(前掲)に於ては、消費財の效用は専ら消費量による。従つて總消費の效用も亦總消費の絶對量によつて定まるであらう。社會の消費者を $1, 2, \dots, i, j, \dots, n$ とするならば、主體 i の總效用は其消費量 C_i の函數である。これは傳統的思考様式である。これに缺けたる方面がある。それは誇示に於ける效用がとり入れられていない。それは周圍の人々との比較に於て自ら認める效用を見ない。之を取入れると其效用は一方消費の絶對量に依存し、他方その相對量に依存することになる。けれども第三の立場も考えられる。それは事實上、絶對量に依存することは輕い。相對量の如何に抱わらず、即ち一定の高さに於てあるにしても、絶對量がある限度を下れば生活も出來ぬ。けれども今日の一般的生活水準に於ては個々の主體の關心が相對量にあつて、このことに氣を配つてゐると生活の最低必要量は自由財にいつても用意が出來てゐるかの意識をもたせるとも考え得る。そうすると、消費效用を大體には相對量に依存するが如く取扱うという立場も成立し得るであらう。デュウゼンベリの定式化は此第三の方向をとるのではない。従つて消費から得らるる效用は自己の消費量の周圍の消費量に對する割合に依存する。後者を次の如くに理解しよう。主體 i は自己を除く $1, \dots, j, \dots, n$ の人々に接觸し、相手の消費量(消費水準、からの作用を受ける。それには接觸の頻度により重さをつけるべきである。 a_{ij} 主體 i が、 j の主體の消費に關心をもちそれから影響をうける率である。相手の消費 C_j に其重さをつけたものを、すべての主體を通じて總計すると $\sum a_{ij}C_j$ を得る。これを常識的にいへば加重したる世間消費量(主體當り)である。 U_i は i の總消費の效用指標である。

$$U_i = U_i(C_i, \sum a_{ij}C_j), \quad U_i = U_i(C_i/R_i) \quad \text{但し} \quad R_i = \sum a_{ij}C_j \quad \dots\dots\dots(a)$$

他人の消費量以外利子、資産等が消費の效用の上に一定の影響をもつてあらうが、これらを切離して、一次接近的

に自己の消費が周囲の消費水準と自己の所得とから規定せらるるものと想定するのが事態を見通し易くする。

此點に關するデューゼンベリの推論の進行をあつけない。

效用函數の考察に當り、「われらは各變數を接觸相手の消費支出の加重平均 R_i を以て除することにより、他人の消費の影響を考察にとり入れる。 a_i^j は i 番目の個人が j 番目の消費に認める重さである。 $R_i = \sum_j a_i^j C_j$ の R_i の値は各人によつてパラメタとしてとられる。これはすべてのもの(所得、資産、消費など)を他人の消費支出を單位とするに等しい。」 Y_1, Y_2, \dots, Y_n を主體 i の n 期までの毎期所得とし、 A_i を彼の資産とし、 r_1, r_2, \dots, r_n を毎期の利子とすれば相対消費 C_i/R_i は次の諸變動によつて定まる。

$$C_i/R_i = f(Y_1/R_1, Y_2/R_2, \dots, Y_n/R_n, A_i/R_i, r_1, \dots, r_n) \quad \dots\dots\dots (b)$$

人數を n とすれば (これは利子 r とまぎれるが D 教授はそれをさけていない)、かかる形式の消費方程式を得る。

普通の消費方程式の形に近いが、すべてが消費も變數も他人の一定消費量を單位として計測せられているという點だけがちがう。 n 個の方程式は n 人の今期の均衡消費値を決定する。

デューゼンベリはこれから次の如くに結論を求める。 Y の位置がちがう二の段階を考へて比較靜學的考察を加へる。前後に於て、所得消費以外の他の變數は變化なきものとする。即ち (1) 所得分布は變化せず、各人の所得は一樣に k 倍する。(2) 各期の利子は變化せぬ。(3) 將來所得と現期所得の比率は變化せぬ。(4) 後の三の條件は資産が k 倍になつたことを意味する。利子と人々の年令分布も不變と定められる。此場合、所得増加の結果は何であるか。方程式の形式は總消費の對所得比率を發見させる。すべての個人所得 Y の一定値に對する C_i の組を想定せよ。所得と資産とが一樣に k 倍する。比 $C_i/\sum_j a_i^j C_j$ は變化しないであらう、分母も分子も比例的に變化するから。同様に比

$Y_a/\Sigma a_i C_i$ 等も變化しないであらう。 C_i の組が前の所得によつての解であつたならば、各人の所得が等しくを倍せられた場合、古き C_i の各々を倍することによつて新しき C_i の組が得られよう。かくて均衡に於ては消費は所得に釣合ひ、貯蓄率は所得の絶対水準には依存しない。

この部分は James Duesenberry, *Income, Saving and the Theory of Consumer Behavior*, 1949, pp. 34—37. からの抜き書きに外ならぬ。もつと筋道を立てて書きたいが原文が私にはつかみ易くはないので、なるべく説明追加をさせた。私には消費函数が何故にかかる形式をとる事が重要な問題であるが、それを求めにくいと思われた。

さて此推論は私に理解しがたく見える。資産を捨象しよう。 C_i/R_i が變化せぬ爲には所得 Y_1, \dots 、従つて所得 Y につれて R_i が k 倍することを要する。而もそれは $C_1 C_2 \dots C_n$ が k 倍することを意味するから、 C_i/R_i 不變の説明は、 C_i が k 倍になることを R_i が k 倍になることの中に前提するから、循環論證に陥る外はない。事實上各自の所得が k 倍になることによつて各自の C_i が k 倍するとは斷定しがたいであらう。問題はそればかりではないと思う。

(1) (a) 方程式について。論證の出發點について考えたい。消費の效用指標 U_i を定めるものは相對消費 C_i/R_i である。これは消費效用が消費の絶対水準に全然依存せず、餓死に近きときの比率とアメリカ文明に於けるこの比率とが、相等しければ消費效用も等しいという結論に導くであらう。財の誘示效用は此比率によるとしても、實質效用は絕對量によつて作用せらるるはずである。(2) 以上の理由から見て (b) 方程式の示す如く消費が相對所得 Y/R_i のみを變數として定まるとは考えられない。所得の絕對値が作用を營まぬはずはない。決定せらるる左邊は相對消費であるといつても R_i を尺度とする消費そのものではないか。(3) R_i は主體にとつて其消費態度を決定する死活の重要さをもつ。然るに數式にあらわされた R_i は計算の尺度たるに過ぎぬ。この死活の意義はどこにも見られない。(b) 式

は其實、分母を R_i を1とする限り $C_i = f(Y_i, \dots)$ という普通の消費函数と形式上別に變ることないであらう。普通の消費函数の式から所得を倍すれば各人の消費も倍すると云い得ざるが如く、(b)式からもそれを云い得ぬであらう。(4) (b)式は任意の主體 i に關する消費方程式である。ところで、所得が k 倍になつたときの消費の増加如何を求めようとする消費方程式は社會的(集計的)消費方程式でなくてはならぬ。然るに(b)式はそのまま集計にたえるものではない。何となれば R_i という分母は何千萬ある。(b)式は普通の消費方程式 $C = a + bY$ にまで改述せられ、 YA の尺度としては貨幣を以てしなくてはならぬであらう。そうすると(b)方程式の入りこむ餘地も必要もないことにならぬのではないか。かかる事態から脱出しようとするならば R_i が別の意義をもつものでなくてはならず、その考察の爲には主體の態度の内面分析を必要とするのであらう。此點について、解釋が行われることを注目したい。(b)式の場合、 A を無視し、所得も現在所得のみを考えるものとする。そうすると結論を手近に導き出し得る。消費函数を一次と假定しよう。

$$C_i/R_i = a + b(Y_i/R_i) \dots (c),$$

$$\therefore C_i/Y_i = b + a/(Y_i/R_i) \dots (d)$$

この式によれば、 R_i を一定として Y_i が高まれば消費率 C_i/Y_i が低下するが、 Y_i も R_i も共に高まれば C_i/Y_i は不變のままである。こういう結果を意味せられている。 R_i が一定で Y_i が高まるという場合は、大體に於て家計調査の所得階層の消費の動きを示す。他方 R_i/Y_i が等比例に高まるということは生活水準の一般上昇によつて社會の消費率が長期的には不變であることを示す。こういう主張が意味されている。ところで(c)式は普通の消費函数に於ける C/Y に代わるに $C/R_i Y/R_i$ を以てしたものと見るべきであらう。それは相對的消費、相對的所得というものが主體の考慮を動かすという理由によるものと思う。アレン・ポオレイ以來普通の消費函数の現實適合は大體に於て承認せら

れている。ところがこれから(c)式への移行を考えて見る。それは消費量の決定に於て世間消費に對する消費比率のみが效用を決定することなしには、考え得べからざることである。そうして普通の消費函數のCにC/Rを、YにY/Rをとりかえる。これは類推であらうが推論ではない。その事實の適合を検討してはじめて學問的市民權をもつべきかと思う。ところで之を承認して前提とし得るか。Rが動かぬとすれば(d)式の右邊はYが大となるにつれてbに收斂する。これは普通の家計比較に見られる消費函數(アメリカ商務者家計調査表参照)を説明するものと云われる。しかし家計調査に於けるが如く、家計に於ける所得收支の同時的比較についていうならば、Y高ければRも高い。従つてY大なればC/Yが低いという結論は必然的であるとはいへぬ。デニウゼンベリ消費函數はかかる萬能のものではない。これを説明しようとするならばRに重要な社會的意義をもたせねばならぬ。接觸の頻度という機械的因子からは此意義は明にされぬであらう。次にRとYとが平行的に變化するならばC/Yは長期的に同一である。これがクズネツ貯蓄率の安定を意味するという點については次の如くに考えたい。Y/R₀の分母分子ともに一樣に變化するならば、所得Yの絶對値が如何に上下しても消費率(平均)は變化せぬということを、前提として、貯蓄率の長期安定(クズネツ)を説明し得ずとはいわぬ。けれども此平行上昇が如何にして可能なるか、進みていえばD教授によつて個人消費が世間消費に追隨することは説明せられたが、後者の上昇の必然的メカニズムは明にされていない。長期貯蓄率の上にRは必ずしも安定的效果のみを與えるものではない。又貯蓄率の長期安定というものも必然的のものではない。一九三〇年代にはあまりにも低下している。日本の貯蓄率も二次大戰前後に激動があり明治以來の二〇%の長期的貯蓄率が今は支配し得なくなつてゐる。すべてはデニウゼンベリに於けるR即ち世間消費率又は消費標準に關する分析の不足より來る。此點について私は大川一司教授の研究から學びたいと思つてゐる。

デュウゼンベリ消費函數については、篠原三代平教授の長期に亘りて倦むことなき研究をまづあげねばならぬ。大熊一郎氏、長崎大學の吉田靖彦氏の研究また注目せらるべきである。なお R についての私見は次の機會をもちて發表したい。